SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.13
2018.09

清掃を続ければ必ず
きれいな海になる！

Take Free

清掃を続ければ必ずきれいな海になる！
―坂本昭夫さん―

文・森 休八郎

横浜・山下公園や江ノ島、宮城県雄勝町など各地の海底・湖底の清掃、海の生き物調査、アマモの移植――海を舞台に八面六臂に活躍する坂本昭夫の原点は、ある女性からの一言だ、という。

「もしあの言葉がなかったら、今のぼくはいませんね」

海から上がって水を浴び、濡れた髪をタオルで拭いながら、坂本はそう語った。その"言葉"にいたるまでの人生は、そしてその後の人生はどんなものだったのか。それもまた、さまざまな出会いと縁に彩られたものだった。

虚弱だった少年時代

坂本は1957年、横浜・幸ヶ谷に生まれたハマっ子である。

「親父は土佐の室戸出身で、三崎を母港とする遠洋マグロ漁船の乗組員。母は横浜出身で、三崎で知り合って結婚したそうです」

当時のマグロ漁船は300トンほどの大きさで、いったん岬を出港すると、3年は帰国することはなかった。

「インド洋で漁をしつつ西へと向かい、スエズ運河を通るか喜望峰を回って大西洋へ。アフリカ大陸北西のカナリア諸島にある拠点をベースに、マグロ漁をするわけです」

坂本の父は、漁船では"ナンバン"と呼ばれていた。これは一等航海士のことを"チョッサー"、甲板長を"ボースン"と言うのと同じ船員の隠語で、「ナンバーワン」を意味する。

「親父は叩き上げの船員でしたが、機関長よりも機械を修理できる男でした。長い航海の間、船にはどうしても故障が発生しますが、オヤジはそれをたちどころに修理していたので、"ナンバン"と言われていたようですね」

3年に1度しか会えない父親だったが、カッコイイという憧れはあった。しかし、帰国するまでは母子家庭である。母からは「あんたは男だから、家をちゃんと守りなさい」と言われて育った。いくらカッコイイとは思っても、自分が船

乗りになろうなどと思うことはなかった。
　そもそも、小さい頃は体がとても弱かった。小柄で、ガリガリにやせていた。
「心臓の弁膜症で、中学生の時に倒れました。20歳まで生きられない、人工弁を入れたほうがいいと医者に言われたんですが、当時のことですから技術はまだ未熟です。母は『それが寿命なら仕方ない』と言っていましたし、手術には断固反対しました」
　どうしても強くなりたかった。体はもちろん、心も強くなりたかった。そこで始めたのが空手だ。これが坂本を変えるきかっけになる。弱かった体は徐々に強くなっていった。

文学青年はキルケゴールにどっぷりと

　一方で読書も好きで、さまざまな本を読み漁っていた。高校時代には、大学の国文科を出たばかりの国語教師と意気投合して、おすすめの本を次々と読破する日々。文学青年である。
「ある時、先生が『これから哲学も勉強しないといけないよ』と言って、いろいろ教えてもらったものの中に、キルケゴールがあったんです」
　セーレン・オービエ・キルケゴール。1813年、デンマークのコペンハーゲンに生まれて1855年に死去した哲学者・思想家で、実存主義の始祖とも先駆けとも言われている。
「すぐに有隣堂に駆け込んで読み、感動と共感を覚えました。が、翻訳があまりにもひどかった。言い回しも文章も、日本語として成立していないんです。最初は、もっとちゃんとした日本語で読みたい、という思いだったんですが、それがやがて、“原文で読んで自分なりににちゃんと咀嚼したい、本質をつかみたい”という気持ちがどんどん強くなりました。大学ではデンマーク語を勉強しよう、と決意したんです」
　だが当時、デンマーク語を学べる大学は東海大学しかなかった。他大学への進学をやめ東海大に進む。親には「申し訳ないけど、と謝りましたよ。すると母は、『学費は出す。でも交通費や生活費は自分でアルバイトして稼ぎなさい』と許してくれました」
　日本で唯一のデンマーク語専攻。当たり前だが日本語で書かれた教科書もなく、辞書もない。授業はすべて英語だ。
「幸い、中学から高校にかけて、家の近所にあった美術学校に来る留学生と交流があって、英語ができたのが助かった」
　講師は駐日デンマーク大使館の職員が務めてくれる。
「ブロンドの髪に青い瞳、ミニスカートにブーツ姿の北欧系のレディが先生だっりしたから、“この先生と何とかデートするんだ！”なんてことをモチベーションに、一所懸命勉強しましたよ」
　やりたい勉強を思い切りやる。さらに少林寺拳法部に所属してこちらにも精を出す。晩生だったのか、大学時代に身長がぐんぐん伸び、普通以上に立派な体格に恵まれることになった。
「卒論はもちろん、キルケゴールの代表作『死に至る病』をテーマにしました。最高の評価をつけてもらい、大学に永久保存になりましたよ」
　よき時代の善き学生生活を堪能したのだ。
「就職のことなど考えてなかった。横浜のレコード店でアルバイトしてましたが、卒業後もこのままここで働いてもいいな、なんて思ったりしていました」
　そんな大学4年の夏、1978年のある日。レコード店の店長から、「友人が勤める物流会社が、体育会系の人材が欲しいと言ってけれど会ってみる？」と声を掛けられた。よし、と店長の友人、その上司の課長と3人で一緒に飲んだ。
「課長さんとは4軒ハシゴして夜中まで飲んだんだけど、その後連絡がなかった」
　ところが年末のクリスマスイブの日、件の課長からいきなり電話があった。
「開口一番、『就職決まったから』と。『ありがとうございます』と返す間もなく、『ついては年明けからアルバイトとして出社しろ。4月からは一人前のスタッフとして頑張ってもらうからな』。もうびっくりですよ。で、年明け1月4日には、スーツを着て出社しました」
　海外物流の仕事が多かったため、当時はタイプライターが打てることが必須だった。が、坂本にはその経験はゼロ。
「オリベッティのタイプライターと教習本を買って、家で練習しましたよ」
　こうして坂本の社会人生活が、スタートした。

檜原湖の湖底清掃

檜原湖湖底清掃　タイヤの引き上げ

ダイビングに目覚めて

一方で、体を動かすことも怠らなかった。少林寺拳法はもちろん、居合道や合気道にも取り組んだ。とにかく精神力を鍛えたかったのだ。ところが、挫折を味わう。視力が急激に落ちて、眼鏡をかけざるをえなくなったのだ。
「これでは、少林寺の試合には出られない。やめてもしょうがないな、という気持ちになりました」
しかし、縁とは不思議である。1980年当時、自宅は幸ヶ谷から三ツ沢に移っていたが、そのすぐそばにダイビングショップがオープンしたのだ。
「ダイビング、いいかもしれないという勘が働いて、すぐショップに飛び込みました」
気になったのは、自分の視力だ。だが、水中眼鏡に度を入れられるから問題ない、と言う。
「やりたいです、と言っていました。ぼくがショップの第1号の生徒になりました」
さっそく、体験に行く。5月のことだった。車に乗せられて熱海に連れていかれ、いきなり船に乗せられ、指導を受けながら、生まれて初めて海に潜った。
「感動でした。広い海の中で、自分の吐く泡が立ち上るのが見える。重力を感じないことがなぜこんなに素晴らしいんだろう。自分はこんなにちっぽけだけど、海はすごい――そんないろんな感動が体を駆け巡り、一発でスキューバダイビングにハマってしまいました」
しかもである。ショップのチーフインストラクターが、映画撮影のクルーを務めたり、有名な映画俳優を何人も教えるほどの、いわばダイビング界の大御所のような人物だった。
「『お前に全部教えるから、インストラクターになれ』と言われました。それからは想像を絶する厳しいトレーニングの日々で、趣味プラス鍛錬のダイビングになりましたが、頑張ってダイビングのあらゆるライセンスを取り、ぼくがショップで教える立場にもなりました」
仲間、教え子とダイビングで多くの人とのつながりができた。そんな仲間と「テールダイビングクラブ」を作り、自らが会長となって遊ぶようになった。そしてここで、冒頭で紹介した「ある女性」の言葉に出会いうことになる。

「海をきれいにして潜りましょう!」

「1980年ですね、みんなで伊豆の大瀬崎に潜りに行ったんです。ところがダイビングポイントに近づくと、ビニール袋がプカプカ浮いている。ちょうど、スーパーとかの買い物袋が、ビニール製が主流になりつつあった頃ですね。で、それを目にしたクラブメンバーのある女の子が、『これひどいですよね。せっかくならきれいな海に潜りたいから、ゴミ拾ってから潜りましょう』とぼくに言ってきた。『いいね、やろう!』と答え、それからは、潜水する前に必ず海面の清掃をするようになりました」
さらに翌年、坂本は件の女性からこんな話を聞いた。
「『この間、彼氏と山下公園でデートしたんですよ。そしたら海はゴミだらけで、とっても汚いんです。会長、あの山下公園の海のゴミって、うちらで掃除できませんか?』と言うんですよ。この時もぼくの返事は『いいね!　やろう!』でした」
坂本はさっそく、横浜市役所に問い合わせた。すると、「海をつくる会」という団体が7月に山下公園の清掃を計画している、という。今度は「つくる会」の事務局長に連絡した。
「先方にとっても、潜水して海底清掃という申し出は願ったりかなったりのことだったようで、協力が決まりました。第1回清掃の当日には、クラブメンバー50人が集結して、山下公園の海に潜りましたよ」
海の状況は、想像を絶するものだったという。潜るというより沈むだけ。飲み物のビンや缶といった途方もない量のゴミを手に取って引き上げるという作業を続ける。1回で清掃するゴミの量は5トンに及ぶこともあった。

山下公園海底清掃

「毎年1回の清掃なんですが、地道に活動しました。10年経った頃でしょうか、ようやく目の前のゴミがなくなったんです。するとそこには、きれいなきれいな白砂がありました。これを見た時、一番感激しましたね」

坂本はこれで確信した。清掃すれば、必ずきれいな海に戻るんだ、と。海底清掃をいろいろなところで続けよう、と決意した瞬間だった。なお山下公園の清掃は今も続けられ、今年38回目を迎えたという。

山下公園の海底清掃で引き揚げたゴミ

行く道は遠いが

とはいえ、坂本はサラリーマンである。だが、並みのサラリーマンではなかった。海外物流畑を歩んだため、1986年から10年間も香港に駐在。ここを拠点に、東南アジア各地で現地法人の立ち上げに尽力するなど、スーパービジネスマンとして活躍する。その忙しさは尋常ではなかった。だが、

「香港でもダイビングクラブを作って潜っていましたし、山下公園清掃の時は必ず帰国してました」

1997年に帰国すると同時に「海をつくる会」の事務局長に就任。ここから海の活動もさらに広がった。横浜・野島公園の清掃をこの年から始め、2000年には芦ノ湖の湖底清掃もスタートし、"海の林"と言われる海草アマモの育成と移植も同時期に始めた。

「山下公園の経験とノウハウが、他のところでも生かせるという自信がありました」

仕事も順風満帆、だったはずだが、会社の経営方針とぶつかり、50歳で引き抜かれる形で専門商社の海外物流部門に移る。そして4年前からは、「日本釣振興会」の事務局に務めるようになった。

「これも縁なんです。日釣振は2006年から、プロダイバーにお願いして釣り場の海底清掃を行っていたんですが、それをボランティアダイバーに変えた。その時にまず声がかかったのが『海をつくる会』でした。最初はそういう関係でお付き合いしているうち、釣振興会の清掃担当として働いてくれないか、と話があったので、移ることにしました」

そして今は、毎週どこかで海底や湖底の清掃をしている、という坂本。その思いは、目に見えるゴミだけでなく、見えない汚染物にも向けられている。

「今問題なのは、下水処理場で処理できないものがそのまま海に流されている、ということですね。例えばトイレ洗剤。どの会社も、トイレの汚れが落ちればいいというその合理性だけで商品を開発し、売っている。でもそこで使われた薬剤を、処理場では完全に処理できないわけです。本来なら処理をする行政ときちんと話し合って、商品を考えるべきなのに……」

だが、そう語る坂本の顔は決して暗くない。

「われわれの行く道はまだまだ遠い。でも行動し続けることが大事なんです」――。

（文中敬称略）

海をつくる会HP
http://umikai.sakura.ne.jp/　（10月リニューアルオープン予定）

海をつくる会ブログ
https://blog.goo.ne.jp/umiotsukurukai1981

アマモを播種する坂本

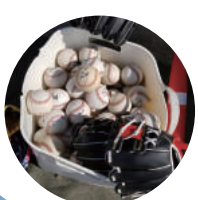
元プロ野球選手・古木克明さんと一緒に野球で遊ぼう
ビーチでアサカツキャッチボール

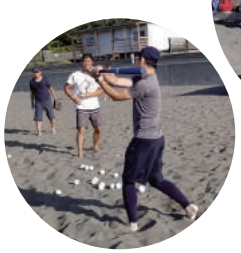
2018年8月18日(土) 6:00 - 8:00
神奈川湘南平塚ビーチパーク

朝6時～8時まで、平塚のビーチパークにおいて、"海の学び場"『湘南VISION大学』授業、「ビーチでアサカツキャッチボール～元プロ野球選手・古木克明さんと一緒に野球で遊ぼう～」を開催しました！

総勢30名ほどの参加で、準備運動からはじまり、砂浜ダッシュ、キャッチボール、三角ベースなどみんなで盛り上がりました。ちびっこも大活躍、大人も本気で楽しみました。気持ちの良い汗をかいて、笑顔いっぱいの２時間でした。

元プロ野球選手の古木克明さんに投げてもらったボールを打つなんて、なかなか無い経験です。
感激しました～　　（文・関水裕子）





真夏の夜、幻想的な海でゴルフをしよう!
Night Golf in 由比ガ浜海水浴場

8月18日(土) ・8月19日(日) 19:00 - 21:30
由比ガ浜海水浴場

由比ガ浜海水浴場で、"海の学び場"『湘南VISION大学』授業、「Night Golf in 由比ガ浜海水浴場〜真夏の夜、幻想的な海でゴルフをしよう!〜」を開催しました!

夜のビーチは星も月もきれいで、心地よい風が吹く絶好のコンディション。LEDライトが内蔵されたゴルフボールが夜空に舞い、的に当たると大きなかぼちゃ(笑)がピカピカ光ります。彼氏やお父さんも、彼女や奥さま・お子さんにカッコいいところを見せられ大満足!もちろん女性もお子さんもゴルフ初心者の方も、GDOのスタッフの方が丁寧に教えてくれ、200人以上の参加者が集まった大盛況の楽しいイベントとなりました。

Night Golf後は「NPO法人湘南ビジョン研究所」スタッフがリードして、参加者とビーチクリーン。「来たときより海をキレイにして帰る」。そんな環境に優しいイベントにもなりました。「株式会社ゴルフダイジェスト・オンライン(GDO)」様、本当にありがとうございました。

(文・片山 清宏)

let's have fun!
配布・設置していただける場所を募集しています

AD

藤沢スマイル歯科医院

いたくない！小児歯科から歯周病治療。入れ歯治療まで

スタッフ募集　笑顔あふれる新しい職場

【募集要項】若干名
【交通費】全額支給（車通勤OK!）
【待遇充実!食事代補助】
【設立】2008年
【科】一般、小児、矯正、審美、予防、ホワイトニング、歯周病治療、顎関節治療
【休】完全週休2日制（水、祝、他1日）※祝日週の振替診療なし
【就業時間】（月、火、木、金）10：00〜20：00
（土、日）10：00〜18：00　各日休憩90分
【他】夏季5日　冬季5日

トレアージュ白旗2F医療モール（小田急江ノ島線　藤沢本町から徒歩5分）
無料大型駐車場あり
HP　http://www.fujisawa-smileshika.jp

映画と本とパンの店 シネコヤ CINEKOYA

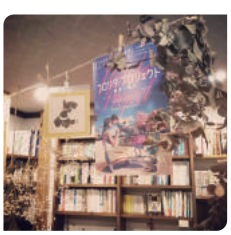
映画の余韻が好きです。そして、そのあと映画について話したくなります。

シネコヤでは、毎月1回「おしゃべり考房」を開催しています。発案は、湘南ビジョン研究所のヨウさん。シネコヤ店主と、マスター・ヨウさんがお迎えして、今月の本や映画について語り合います。

昔の映画サロンみたいな、その映画や本について、みんな目をキラキラさせて、あのシーンはどうだとか、あの人はこういう気持ちだったんじゃないか、とか、好きなものを囲んでお話をする…シネコヤが、そんな場所であったらいいなと、いつかやりたいと願っていた企画でした。

これまで開催した中では、海をテーマにした映画『鏡は嘘をつかない』、菅田将暉さん主演で話題となった『あゝ、荒野』、そして「わたしの好きな詩」をテーマに参加者が詩集を持ち寄って好きな詩を紹介したり。そこに集う人たちと、映画や本をきっかけに、興味や知識が広がっていくこと。

それこそ、シネコヤのめざす街の小さなお店の姿なのです。



◆日時：10月5日（金）19:30〜20:30ごろ
◆今月のテーマ：『フロリダ・プロジェクト 真夏の魔法』
◆定員：5名
◆参加費　500円（茶菓子付き）

●店舗概要
TEL：0466-33-5393　住所：藤沢市鵠沼海岸3-4-6
営業時間：9:00〜20:00　定休日：木曜日　アクセス：鵠沼海岸駅より徒歩3分

SHONAN VISION
Social Magazine
Vol.13
2018.09

PUBLISHER：片山清宏
EDITOR IN CHIEF：森休八郎
ART DIRECTOR：大戸千尋
EDITORIAL STAFF：関水裕子　片山清宏
COVER PHOTO：森休八郎

web http://shonan-vision.org/
@shonanvision
info@shonan-vision.org

SHONAN VISION vol.13 | 2018年9月号 2018年9月25日発行 発行：NPO法人湘南ビジョン研究所 〒251−0027神奈川県藤沢市鵠沼桜が岡3−9−29 shonan-vision.org